

第6学年1組 国語科学習指導案

第2校時 場所 6年1組教室 指導者 溝上 剛道

1 単元名 視点のちがいに着目して読み、『卒業文集“あしたのことば”』を書こう（「帰り道」光村図書6年）

子どもたちは5年時に「大造じいさんとガン」で、人物像を想像する学習を経験してきている。その中で、全員が「学習課題」の達成の達成に向けて問いを立て、複数の叙述から人物像を想像していくことができた。しかし、中には自分の読みに固執し、中心人物のものの見方や考え方に寄り添った視点で読むことができていない子どもも見られた。

そのような子どもたちに、本単元では「帰り道」と出合わせる。本作品最大の特徴は、同じ出来事について、「1」は「律」の視点、「2」は「周也」の視点で描かれていることである。この「1」「2」をつなげ、それぞれの人物の視点に寄り添いながらものの見方や考え方を捉え、心情の変化を具体的に想像する力を身に付けていってほしいと願う。

そこで本単元では『卒業文集“あしたのことば”を書く』という言語活動を核にした単元を構想する。短編集「あしたのことば」の登場人物たちが卒業文集を書くとしたら、それぞれの人物は自分自身をどう捉え、作中に描かれた出来事をどう振り返るかを想像し、それを文集原稿として書いていく。この言語活動に取り組む中で、自他の働かせた見方・考え方に立ち止まりながら、自分なりの意味を創り出す「深い学び」を生み出していく。

2 単元について

(1) 本単元では「帰り道」を学習材として取り上げる。視点の違いに着目し、描写を基に、登場人物の相互関係や心情の変化を捉える力の育成をねらう。

本学習材は、同じ出来事について、「1」は「律」の視点、「2」は「周也」の視点で描かれている。一人称視点のため心内語が多く、それぞれの視点から自分自身をどう思っているのか、相手に対してどう思っているのかが語られていく。「1」と「2」がそれぞれの視点から描かれていることで、両者のすれ違いと心の通い合いが浮かび上がってくる構造になっている。また、情景描写や「みぞおち」「ピンポン球」などの暗示的表現も多く、それらの表現を基に人物の心情や相互関係、人物像を具体的に想像することができる。子どもたちにとっては、同年代の物語で、下校時という場面やけんかという出来事等、どれも身近な設定となっており、自分の経験と重ねながら読みやすい作品と言える。

そのような学習材の特徴を生かし、本単元では人物像を具体的に想像する力の育成のために、『卒業文集“あしたのことば”を書く』という言語活動を核にした単元を構想する。

(2) 子どもたちは5年時に「大造じいさんとガン」を学習材とした単元において、優れた表現に着目して人物像を捉える学習を経験してきている。本単元で視点や描写に着目して相互関係や心情の変化を捉える学習は、「やまなし」で、作品の世界をとらえ自分の考えをまとめる学習につながっていく。

(3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数：36人）

① 前単元において、登場人物のものの見方や考え方を捉えていく際に、自分の考え方に固執してしまい、人物の心情に寄り添った読みがなかなかできない子どもが4名ほどいた。

② 言語活動として取り組むような自分の経験を振り返って作文に表すことに時間を要する子どもが6名ほどいる。

(4) 指導にあたっての留意点は、次の通りである。

① 単元導入では、「あしたのことば」（小峰書店）のイントロダクションムービー（YouTube）を提示し、その中の「言い尽くせない不安をかかえる今こそ大切にしたい 人々をつなぐ『こ

とば』「それは、希望です」などの言葉に触れさせた上で「帰り道」を範読する。そして、「律」や「周也」が自分自身をどう見ているか、互いのことをどう見ているかについての気づきを取り上げ、「1」「2」での視点の転換と結びつけながら、単元の学習課題を設定する。

- ② 第二次では、「律」と「周也」になりきって、『卒業文集』の原稿を書く活動に取り組みせていく。その中で出てきた困りごとや、納得いかないところなどを振り返らせたり、他者の表現と比べさせたりすることで、自他の考えに立ち止まりながら問いを見いだしていけるようにする。
- ③ 互いの活動状況について確認したいことを問い、全体の場合を「誰にかかわっていくかの見通しをもつための場」として活用させる。また、個々の活動中にも、新たに生じている困りごとを見取り、子どもの必要感に応じて全体に問いかける場を設定していく。
- ④ 本時では、「律」と「周也」の心情の変化を象徴する暗示的表現をどう解釈すればよいかで困っている子どもを取り上げる。その困りごとについて全体で検討することを通して、山場での心情の変化を暗示的表現に着目しながら捉え直し、再度それぞれが書いている『卒業文集』の原稿を見直していく学びを生み出していく。

3 単元の目標

- (1) 語句と語句との関係、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。
- (2) 視点の違いに着目し、登場人物の相互関係や心情の変化などについて、描写を基に捉えることができる。
- (3) 感じたことや考えたことを伝え合う言葉などがもつよさを認識するとともに、同じ作者の物語や視点・構成を効果的に用いた物語等を進んで読もうとする。

4 指導計画（6時間取り扱い）

学習活動	主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援	時間
1 単元の見通しをもつ。	○「律」「周也」のそれぞれが思う自分と、互いへの見方のずれから、人物像をどう捉えるかで迷っていたり納得いかなかったりする思いを取り上げ、次の「学習課題」を設定する。 視点のちがいに着目して登場人物の相互関係や心情の変化をとらえ、『卒業文集“あしたのことば”』を書こう。	1
2 「律」と「周也」になりきって『卒業文集』の原稿を書く。	○ 卒業文集の原稿を書く活動に取り組みさせた上で、迷っていたり、納得いかなかったりしているところを振り返らせ、目的意識をもって問いを立てられるようにする。 ○ 振り返りの中から、解決策については壁面掲示で、各自の活動状況や次への見通しについては一覧プリントで共有しておき、一人一人が見いだした解決策や問いを基準として、他者にかかわっていけるようにする。 ○ 新たな解決策の共有につながる困りごと等は、全体で検討の場を設ける。その際「原稿のどこをどう書き換えられそうか」を問い返し、言語活動を媒介とした対話を促す。	本時 $\frac{3}{4}$
3 学習課題の達成度を振り返る。	○「帰り道」と似た構造の物語「風と雨」を活用した適用課題に取り組みさせ、単元で身に付けた力を振り返らせる。	1

5 本時の学習

(1) 目標

「天気雨」が洗い流した「何か」とは何かについて話し合うことを通して、山場での心情の変化を捉え直し、『卒業文集』の原稿の記述を再考することができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5 10 15	1 前時までの活動状況を確認め合い、本時の見通しをもつ。 2 各自で『卒業文集』の原稿作成の続きに取り組む。	○ 僕は前回の続きから書き始めよう。 ○ 私は一旦書けたから、誰かに読んでほしいな。 ○ 僕は「天気雨」のところでどう心情が変わったのかで困っている。同じような人はいないかな。 ○ 同じ「律」の立場の人と、山場のところの気持ちについて話し合ってみよう。 ○ 天気雨の後、気持ちは変わったんだろうけど、どう変わったのかがなんかはっきりしないな。 ○ 天気雨で洗い流した「何か」は「みぞおちの異物」のことでいいのかな。 ○ だとしたら「みぞおちの異物」は何を表しているんだろう。
15	3 山場での変化について話し合う。	○ 「異物」が消えるというのは、それまで起こっていた気持ちがなくなったってことじゃないかな。 ○ 「周也」は「律」が怒っていると思っていたけど。「律」自身は怒りというよりモヤモヤしていた感じじゃないかな。 ○ そのモヤモヤも「周也」に対してというよりも、自分の思いを言葉にできないことへのモヤモヤじゃないかな。それをつっこまれたから、「みぞおちの辺りにずきっととささった」んだと思う。 ○ 「周也」も「ピンポン球」のことでモヤモヤしていたよね。でも、天気雨でその無数の「ピンポン球」が降ってきたみたいに感じて、二人で大笑いしてなんか吹っ切れたんじゃないかな。
10	4 山場での変化を視点として『卒業文集』の原稿を再考する。	○ 今の原稿だと、そのことが書けていないな。「モヤモヤが晴れた」ってことを書き加えよう。 ○ いや、それだとまだ浅いんじゃない？どんなモヤモヤがあって、それがどう晴れたのかまで書いた方がいいと思う。 ○ そうだね。山場で何が変わったのかが表れるようにもう一度書き直してみよう。
5	5 本時の学習を振り返る。	○ 今日は、山場の変化を「みぞおちの異物」や「ピンポン球」という言葉に着目して考えたことで、「律」や「周也」のモヤモヤの正体が分かった。文集原稿で書き直したいところははっきりしてきたから、次はそこを詳しくしていきたい。



前時までに、山場で二人が仲直りしたことについては捉えられたものの、「律」と「周也」の心情の変化を象徴する暗示的表現をどう解釈すればよいかで困っている子どもがいます。本時ではその困りごとを取り上げて、山場での心情の変化を暗示的表現に着目しながら捉え直し、再度それぞれが書いている『卒業文集』の原稿を見直していく学びを生み出していきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援（発問・指示，教材・教具，評価）

- 前時の振り返りを基に、それぞれが活動に取り組む中で生じた困りごとや、その中で見いだした問いなどを一覧にして共有しておく。導入では、自分が何から取り組み始めるかの見通しをペアで確かめ合わせた上で、他のペアの活動状況について確認したいことを問い、全体の間を「誰にかかわっていくかの見通しをもつための場」としても活用させる。
- 各自で原稿作成の続きに取り組む中で、新たに生じている困りごとを見取り、必要に応じて全体に問いかける場を設定していく。特に、「天気雨の後、何が変わったのかわからない」「天気雨で洗い流した『何か』は『みぞおちの異物』のことでいいのか』『みぞおちの異物』が何を表しているかが分からない」など、山場の変化を捉え直した上で言語活動の再考につながる困りごとや問いについては、全体で検討する場を設定する。

天気雨が洗い流した「何か」とは何だろう。

- 二人のそれぞれの変化を象徴する暗示的な表現として、「律」の「みぞおち」、「周也」の「ピンポン球」という言葉がある。変化前後にあるいずれかの叙述に着目した発言については、同じ叙述や他の場面での関連する言葉に着目していた子どもに発言を促し、暗示的表現に着目しながら登場人物の変容を捉え直していけるようにする。
- 「律」の「考えるほどに、みぞおちのあたりが重くなる。」と「みぞおちの異物が消えていた。」、「周也」の「ピンポン球のことばかり考えていたせいか」と「投げそこなった。でも、…」は、それぞれの人物の変容を象徴する表現である。山場前後で比較した板書を基に、それらの叙述に立ち止まっている発言を捉え、「だとすると、天気雨が洗い流した『何か』とは何だろう。」に立ち返って話し合わせる。
- 全体で話し合う中で新たに着目した叙述を、各自の全文プリントで確かめさせる。その上で、それらの叙述から読み取れる「律」と「周也」の心情やその変化が、自分たちの『卒業文集』の原稿に反映されているかを問い、各自の原稿の再考につなげていく。
- 叙述から離れている子どもに対しては、全文プリントを使って話し合うよう助言する。また、話し合いのみに終始している子どもには、「文集原稿のどこを見直せそうか」を問い、話し合う目的意識を明確にさせる。
- 「学習課題」を視点として、自分の考えに納得いったかどうかを振り返らせる。その記述から、どの言葉に着目しどんな言葉で表現したか（語彙）、どんな解決策を用いたか（思考過程）、次への見通し（自己の学習の調整）を見取る。十分満足できる状況の子どもは全体で紹介して価値づけるとともに、努力を要する子どもには個別に関わり、着目した言葉や診断書を書きかえられそうなところを問い、それを記述するよう助言する。

【教材・教具】

- 全文プリント
- 「律の文集原稿」「周也の文集原稿」（ワークシート）

【評価】

相互関係や心情の変化を関連付けて人物像を捉え直し、『卒業文集』の記述を再考することができる。
(ワークシート、振り返り)